

鶏鳴を聞く時

春 名 康 範

奨励者紹介〔はるな・やすのり〕

日本キリスト教団天満教会牧師

「その日、その時は、だれも知らない。天使たちも子も知らない。父だけがご存じである。気をつけて、目を覚ましていなさい。その時がいつなのか、あなたがたには分からないからである。それは、ちょうど、家を後に旅に出る人が、僕たちに仕事を割り当てて責任を持たせ、門番には目を覚ましているようにと、言いつけておくようなものだ。だから、目を覚ましていなさい。いつ家の主人が帰って来るのか、夕方か、夜中か、鶏の鳴くころか、明け方か、あなたがたには分からないからである。主人が突然帰って来て、あなたがたが眠っているのを見つけるかもしれない。あなたがたに言うことは、すべての人に言うのだ。目を覚ましていなさい。」

(マルコによる福音書 13章32—37節)

鶏の鳴き声が聞こえる時

今年はトリ年です。「酉年」の「鳥」は鶏です。ニワトリと言えば、聖書ではまずペトロの裏切りを思い出します。最後の晩餐の時、ペトロは「たとえ、みんながつまずいても、わたしはつまずきません」と言いましたが、イエス様が「あなたは、今日、今夜、鶏が二度鳴く前に、三度わたしのことを知らないと言うだろう」(マルコによる福音書14章30節)と言われた。そして、その夜、ペトロは3回イエス様を裏切って「知らない」と言ってしまった。すると、鶏が鳴いたとすべての福音書が記録しています。

もう1回は、主人が帰って来るのは夜中か、鶏が鳴くころか、分からないから「目を覚ましていなさい」(マルコによる福音書13章37節)とイエス様が言われたくだりて、鶏が出てきます。新約聖書の中に出て来る「鶏」は、この2回で、いずれも気を付けなさいという警鐘を鳴らすイメージで使われています。

ミクロネシアのポンペイ島では鶏が朝一番に「オカーサン」と鳴きます。戦時中、駐屯していた日本兵は故郷のお母さんを毎朝思い出して、早く戦争が終わって故郷に帰れる日を待ち望んだと思います。エルサレムでは鶏は何と鳴いたのでしょうか。

新島先生と鶏の鳴き声

新島襄も大磯の旅籠で鶏の鳴き声を聞いています。勿論、日本の鶏ですから「コケコッコー」と鳴いたに違いありません。新島襄は大学を創るために募金活動をしていて、体は疲労の限界に達して、群馬から神奈川の大磯に移って、しばし休養をとっていました。あまり知られていない事実ですが、新島先生はリュウマチを患っていました。1868年にアーモスト大学にいた時に発症したそうです。当時アメリカではリュウマチになる人が多かったそうです。

リュウマチは体の中の免疫力が外敵を攻撃するのではなく、自分を攻撃して大変な痛みを生み出す病

だそうです、新島先生は手足の関節が痛くて、堪えがたい痛みに耐えながら、大学を創ろうと、募金活動をしていました。そして、動けないほどの痛みで悲鳴を上げて、大磯で休養をとっていたに違いありません。こうして、1890(明治23)年の元旦の朝を迎え、漢詩を詠みました。「送歳休悲病羸身、鶏鳴早已報佳辰、劣才縦乏濟民策、尚抱壯図迎此春」「古い年が過ぎていくのを眺めながら、病気の身を悲しむことをやめよう、にわたりの鳴き声は、すばらしい時が、近づいていることを先触れしているではないか。能力の劣った私でありながら、この世代をよくしようと、貧しい計画をねってきたが、それでもなお、大きな希望を抱きながら、この春を迎えるのである(北垣訳)」(吉田曠二『新島襄—自由への戦略』新教出版社 1988年 231頁)。残念なことに新島はその月23日に天に召されました。新島先生は127年前の一昨日天に召されたのです。

新島先生が若くしてステッキを持っておられたのは、当時の流行りだと思っていましたが、膝や腰が痛くてステッキに頼りながら痛みを耐えておられたのだと思います。そういえば、写真も肖像画も、どこことなく痛みを耐えておられたような引きつりをこめかみに感じます。しかしながら、神様は新島先生の祈りを聞き入れられ、同志社大学を設立されたのです。新島先生にとって、正月の鶏の鳴き声は、自分の肉体的な限界を味わいつつ、それを超えて未来を産みだす神様の可能性を根拠とする「希望」を呼び起こす鳴き声でした。

島の聖女村上春枝さん

昔四国の今治の沖の大島に村上春枝さんという人が住んでいました。11歳の時にリュウマチになって、高熱のために耳が聞こえなくなって、お母さんが看病で疲れて死んでしまい、お父さんは仕事を止めて島のはずれの小屋に住んでいましたが酒に溺れて寄り付かなくなり、春枝さんは寂しいのと痛いのとで、顔が恐ろしく歪み、毎日泣いて暮らしていたそうです。悪がきどもが怖いもの見たさに障子に穴を開けて中を覗いたり、隙間から覗きにきました。悔しいから睨みつけると「恐ろしやー」と言って逃げて行きました。その頃詠んだ歌があります。

「雨のしょぼしょぼ降る夜半に、一人思いを巡らせば、過ぎ越し方の悲しやな、また行く末を思いなば、心細さの極みやな、心語らん友はなし、我を慰む人は無し、あゝ寂しさの極みやな、あゝ寂しさの極みやな」

この春枝さんのことを聞いた今治教会の当時の牧師露無(つゆむ)文治先生、この牧師も同志社出身ですが、春枝さんの家を訪問して、イエス様の話を筆談でしました。すると、乾いた砂に水が吸い込まれるように春枝さんの心にイエス様が入って、信仰をもちました。その時に詠んだ歌が残っています。

「愛深きまことの神に知られてし、わが喜びを何にたとえん」

すると、春枝さんの顔に笑いが起こって来て、悪がきどもが中を覗くと春枝さんが笑っていました。「笑っとる」と不思議がって中に入って来て遊ぶようになりました。その子たちが家で春枝さんのことを話したことで、母親たちもやって来るようになって、春枝さんの家はいつでも誰かが出入りしている家になりました。みんなに惜しまれて37歳で亡くなりましたが、寝たきりの春枝さんのことを島の人々は聖女だと言って尊敬したそうです。

痛みも和らいで

痛みは心のもちようで随分変わってくるそうです。私も昨年椎間板ヘルニアになって、痛くて歩けなくなって、新島先生のことが身近に感じられるようになりました。痛みは記憶とも関連があるようで、「昨日もここまで来たら痛くて歩けなくなった。今日も痛くなるのだろうか」と思ったら、途端に痛みが激しく沸き起こってきました。恐ろしや痛みの力。

ある時、10mほど歩いては痛くて立ち止まって歩いていると、少し先を同じように立ち止まっては歩き、歩いては腰に手を当てて止まっている人がおられました。近づく「イタタ、イタタ」と言っておられましたので、私と同じだと思って声をかけました。「痛いですか。私も右足が痛くて」と言うと、「私も右足です」「椎間板ヘルニアと言われました」と言うと「私もです」と会話が始まって、その人は障碍のある子供が生まれて、抱いて仕事をしている間に、痛みが絶えない体になったのだと話してくださいました。

2人で、「イタタ、イタタ」「本当に痛いですね」と声を掛け合いつつ歩いて地下鉄の駅まで行きました。気が付いてみると200mほどはあったと思いますが、この距離を2人で一度も止まらずに歩いていました。駅に着くと、その人は、初めてお顔を見た時は痛みで歪んでいましたが、明るい顔になっておられて「また会いましょうね」と言われました。「そうですね、お元気で」。私もさわやかな気分になってお別れしました。お名前も、ご住所もお聞きしませんでしたから、その後、会うことはありませんでしたが、不思議な経験でした。

もしかするとイエス様があの方の姿で来られて、私を励ましてくださったのかもしれないと思いました。不思議なことですが、痛みは痛みを共有している人が傍にいるというだけで半減するように思います。

新島先生も、イエス様のことを伝えるために同志社を設立したいという願いが強くあったので、痛み心や体が挫けることなく働くことができたのに違いありません。イエス様が、ともに歩いてくださっているという信仰が痛みを和らげ、克服する力となったのではないのでしょうか。127年前の1月23日、新島先生は天に召されましたが、その後、同志社大学は設立され、今日までいろんな痛みや病を克服して余りある人、人の痛みを和らげる人々をたくさん世に送り出してきました。

私たちの身の周りには、いろんな痛みがあります。肉体的な痛み、精神的な痛み、社会的な痛み、霊的な痛み、それらの痛みイエス・キリストと一緒に痛みながら、私たちと共に歩んでくださっていると信じるところに、希望が生まれます。新島先生や村上春枝さんと同じように、イエス様の愛を知ることによって痛みを支配されない人生を生きましょう。そして、他の人の痛みを理解し、痛みをシェアすることで互いの痛みを和らげる人生にしましょう。幸い私も、教会の人達の祈りに支えられ、整形外科の医師の治療、自分でも四股を踏んだり、ストレッチ体操をしたりして、今では椎間板ヘルニアの痛みから解放されました。全ての痛みは、信仰と希望と愛によって和らげることができると理解して共に生きて行きましょう。

〔参考文献〕

日本基督教団今治教会編『八十年記念誌』日本基督教団今治教会 1959年

2017年1月25日 京田辺水曜チャペル・アワー「奨励」記録